

観 測 案 内 (1月)

木 邊 生

新年 明けて昭和12年、事の多かつた昭和11年を、永遠に送り去つて、元旦の事始めに見る太陽も、月や金星も、姿は昨年、昨日と、何等の變りを見せ無くとも、心なしか、視野に映る彼女達は、我々の新年を壽ぐかの様にさへ感じる。變にコヂれて、何が正月だ！ 地球の運行には少しの變りも無い等と、強ばる所の“天文小兒病患者”は、年頭にして己に自らを屈辱して居る。

1 月 星降る様な暗の霜夜、徒らに靴音のみ高く凍て附いた地表、又は肅々たる松音に“寒月皎々”と照らす月夜の凄愴、總て1月の観測者のみ知る“嚴寒の詩境”である。又豫定の観測プログラムを終へて、チヨロチヨロと燃え残る煖爐の側で、啜る一杯の熱い番茶こそ、氷つた息をばユルユルと解く、萬甘の醍醐味でもある。去年の1月には、近江でさへ、観測中3度もインクに氷り付かれた事を憶えて居る。無論、防寒に萬善を期して観測せねばならない。

天候 シーイング 12月と大差無い。唯、氣温が屢々氷點下に降る。晴れは、表日本では幾分12月より多く、1年中では平均して最良かも知れない。然し、裏日本では、一夜に1メートルも新雪が積る。所謂ドカ雪に見舞はれ、時にはラツセル車でさへベソをかく。

太陽 赤緯はソロソロ昇りかけるが、12月同様の心構へが要る。

金星 半月型近く、視直径は $17.7''$ — $22.9''$ 迄増加する。薄明中、3センチ50倍の視野には、美しい小さな半月型を見せるだろう。

土星 裏から見た輪を、是非、月の前半に見て欲しい。

恒星界 花形役者が、妍麗の美を東天に競つて居る。然し、小望遠鏡にはオリオン星雲以外目ぼしいものが少ない。此の星雲に限り、1センチに付き、10倍位の高倍率の使用が許される。二重星リゲルの伴星はアーク燈の側に控える螢光と云つた感じがする。對照の美よりも、自分の望遠鏡が良好であ

る事を知る喜びの方が大きい。口径は大きくても、不良の器械には苦手の星である。又、カストルは、2個の白ボタンを想はせる。

ベテルギウス 巨大な、赤い、しかも 0.1—1.2 等級の間に變光する星として周知のものである。スペクトルは M0 視差 0.017'', 絶対光度 -2.9 等級、即ち太陽の 1200 倍である。其上、實直径は、同じく 290 倍、質量は 15 倍、平均密度は 6×10^{-7} 倍、即ち空氣の $\frac{1}{2000}$ と算出される所の、途方もないブヨブヨの星である。又、ピーズが干涉計によつて、視直径を計つた最初の恒星としても有名である。其の値が、0.047''—0.034'' に變化すると發表され、10 年



オ リ オ ン

前の天文界の人気話題であつた。いづれにしても、アンタレス、ミラ、 α ヘルクレス等と共に、超巨人星である。更に、忘れてならないのは、恒星中では熱量等級が最も大きい事である。云ひかへれば、最も多量の熱を我々に

補給？して居るのである。其の量は？と問はれると、若し此の星が常に天頂から照して居ても、1年かかつて1坪當り僅か1.4カロリー！然し乍ら、見掛上數倍輝くあのシリウスは、實は此の $\frac{3}{4}$ しか熱を呉れないのである。こう思つて、一度改めて、ベテルギウスを眺めて欲しい。

昨年1月の記録 平均気温 6時 -1.7°C 21時 -0.4°C

平均雲量 6時 5.0 21時 4.6

黒點相對數 1日平均 78.5

観測日數 25日